「チョコレート革命」のあとがき

この歌集のなかの何首かを読んだ友人が、ぽつりと言った。「会いたいときに会えないような、辛い恋をするもんじゃない」。彼は、結婚して二年になる。「でも、会いたくなくても、会えちゃうんでしょう？結婚って」と、私は返した。ついでに「どっちが、愛を育てるかしら」という強がりも添えて。

もう一つ強がりを言うと、私は出会いというものを、このうえなく大切に思っている。あと何年早く出会えていたら、とか、タイミングがもう少し遅ければ、とか、人は言うけれど、そんなのは贅沢なわがままだ。ないものねだりでしかない。出会えたこと、そのことに私は感謝したいし、感動もする。だって、ほんの百年ずれていたら、二人は会えなかったのだから。

六年ぶりの歌集になる。初めての歌集からは、ちょうど十年がたった。年齢でいうと、二十八歳から三十四歳まで。その間の作品を集め、選び、並べかえた。ワープロという便利な道具のおかげで、一首一首を自在に移動させることができるようになった。並べかえの作業は、新しい物語を紡ぐような気持ちで、進めた。

この六年間には、印象にのこる旅がいくつもあったことを、あらためて思う。釧路湿原を訪れたことは、環境問題を身近に具体的に感じるきっかけとなった。フィリピンのマニラ、そしてインドのカルカッタへの旅では、貧富の差というものをまざまざと見、そして人間の生きる力に圧倒された。

けれど、スローガンは書くまい、と思う。現実的な運動や、直接的な言葉に比べたら、歌を紡ぐことは、遠回りのように見えるかもしれない。が、これらの体験から得た地球規模の視野を、私は短歌の畑として、耕してゆきたいと思っている。

恋の歌については、「ほんとうにあったことなんですか？」ということを、しばしば聞かれる。歌が生まれるきっかけやヒントになる人は、決して架空の人物ではな

い。が、この歌集を読んで、思いっきり思い当たる人もいれば、まったく身に覚えのない人も、いるだろう。そのまんまやないかと思う人もいれば、なんでこうなるの？と思う人もいるはずだ。

つまりそういうことで、確かに「ほんとう」と言えるのは、私の心が感じたという部分に限られる。その「ほんとう」を伝えるための「うそ」は、とことんつく。

短歌は、事実を記す日記ではなく、真実を届ける手紙で、ありたい。

人を想って揺れる心は、これからも私にとって、大きなテーマだ。恋の歌は、死ぬまで詠みつづけたい。

タイトルは、次の一首から言葉を選んだ。

男ではなくて大人の返事する君にチョコレート革命起こす

恋には、大人の返事など、いらない。君に向かってひるがえした、甘く苦い反旗。

チョコレート革命とは、そんな気分をとらえた言葉だった。

大人の言葉には、摩擦をさけるための知恵や、自分を守るための方便や、相手を傷つけないためのあいまいさが、たっぷり含まれている。そういった言葉は、生きてゆくために必要なこともあるけれど、恋愛のなかでは、使いたくない種類のものだ。

そしてまた、短歌を作るときにも。言葉が大人の顔をしはじめたら、チョコレート革命を起こさなくては、と思う。

一九九七年　早春　　俵　万智